様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ７ 月 ３１ 日現在

機関番号：３１３０２
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2016
課題番号：２５７８０３１３

研究課題名（和文）リスクに対処するためのレジリエンスと生きられた法の環境社会学的研究

研究課題名（英文）Environmental sociological study of resilience to cope with risk and living law

研究代表者
金菱　清（KANEBISHI, KIYOSHI）

東北学院大学・教養学部・教授

研究者番号：９０４０５８９５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、地域や人々がその社会を根底から破壊する災禍にあっても、災禍を吸収するダイナミズムを保持することを明らかにした。従来どのようにリスクを捉えるのかについて議論されてきたのは、（A）リスクを外部条件としてみなし、それをいかに避けるのか（防潮堤・災害危険区域指定・高台移転）が提示されてきた。それに対し、本研究では（B）内部条件として、（１）災害リスクに対して地域コミュニティや人々が脆弱性を吸収し、回復する力を保持しているのかを明らかにする。（２）千年災禍のなかで、漁村沿岸地域における災害危険区域や水産業復興特区等の強圧的な行政政策に対して対抗論理を志向する実践性（＝生きられた法）を提示する。

研究成果の概要（英文）：　This study revealed that even if local communities encounter disasters that basically destroy society, they will retain dynamism to alleviate the disaster. What has traditionally been discussed about risks is to consider risk as an external condition and how to avoid it (ex. tide breakwater/disaster hazard area/high ground relocation). In contrast, this research clarifies whether the local community holds the power to reduce and recover vulnerability to disaster risk as an internal condition.
　This research presents the practicality (= living law) towards counter logic against the strict administrative policy in the coastal area of the fishing village, in the catastrophe.

研究分野：災害社会学

キーワード：レジリエンス　記録筆記法　痛み温存法　手紙　霊性　災害コミュニティ　曖昧な喪失の意味の豊富化　生ける死者

１．研究開始当初の背景

本研究は、地域コミュニティがその社会を根底から破壊するような災禍にあってもなお、その災禍を吸収するダイナミズムを保持していることを明らかにする。人類学者のホフマンはこのことを、人びとが自然の事象を文化のもとに置き直そうとしたと表現している。そして被災者がなぜ荒廃した地域に戻ってくるのか、災害が慢性的に起こる地域になぜ人は住み続けるのかについて彼女は、経済的理由や安全な場所から締め出されているという理由以外に、宗教的な象徴表現を用いた隠喩が所有の働きをもたらすことを指摘している（ホフマン，2006）。

社会学に引きつけて言えば、人びとの生活サイクルに自然災禍を所与のものとして組み込み所有することで、災禍をコントロール可能なものにしていることを指摘できる。それは千年災害であってもまるで災禍を「所有」するかのように、コミュニティが災害のリスクを“引き受ける”ケースが見受けられるからである。自然科学者が投げかける、なぜリスクがありつつ住むのかという疑問に対しては、津波や原発などのリスクは外部条件ではなく、これまで地域コミュニティが引き受けてきた数あるリスクのうちのひとつであるということを社会科学として応答する。

筆者が編んだ、岩手・宮城・福島を中心とした震災直後の濃密な災害エスノグラフィー『3.11 慟哭の記録―71 人が体感した大津波・原発・巨大地震』（新曜社）が今回の研究の下地となる。トピック・地域を複数に設け小さな出来事を濃密に描くことで、できるだけ現場の生々しい「声」に重きを置いて、実態のつかみにくい 1000 年規模の大災害を社会史としてまるごと理解するためのアプローチをとった。エスノグラフィックに描き出すことで 1000 年規模の災害を把握できるようにし、複合災害の核となる生のデータを収集してきた。さらに社会学的研究を進めたものとして、原発と津波によって非居住地になった地域で人がいかに暮らしをたてコミュニティを再建しうるのかを論じた「千年災禍の所有とコントロール」『東日本大震災と日本社会の再生―社会学からの問いかけ』（ミネルヴァ書房）がある。

また、これまで大阪国際空港の不法占拠を扱った著書『生きられた法の社会学―伊丹空港「不法占拠」はなぜ補償されたのか』（新曜社）を研究成果として刊行しており、そこで提出した生きられた法（=法外生成論）は、法律による例外化状態に対処する人びとやコミュニティから思考された論理である。環境劣悪な貧困地域が多くの場合、法律の適用可能性から閉ざされている点に着目して、人びとが土地に関わることで獲得してきた「正義（＝正統性）」とそれを周りから注視する「公共性」のあり方について社会学的に分析をおこなってきた。この生きられた法論は、漁村沿岸地域における災害危険区域指定や水産業復興特区による漁業権の収奪などを捉える際の理論上の基礎的素地となる。

２．研究の目的

従来災害研究のなかでどのようにリスクを捉えるのかについて議論されてきたのは、（A）リスクを外部条件としてみなし、それをいかに避けるのか（防潮堤・災害危険区域指定・高台移転）が提示されてきたのであり、（B）所与のものとして、コミュニティにおける内部条件として分析された研究はなされていない。そこで本研究では（B）内部条件として、（1）災害リスクに対して地域コミュニティがどのように脆弱性（vulnerability）を吸収し、回復する力（resilience）を保持しているのかを環境社会学的に明らかにする。とりわけ（2）、東日本大震災という千年災禍を目の当たりにし、漁村沿岸地域における災害危険区域指定や水産業復興特区などの強圧的な行政政策（paternalism）に対して対抗論理を志向する実践性（＝生きられた法）を提示する。

３．研究の方法

本研究は、1）東日本大震災において著書「3.11 慟哭の記録」で調査を行った地域ですでに蓄積された資料のデータベース化、2）あらたな文献資料の収集とそのデータベース化が中心となる。それと並行して、3）国内・海外のリスクや災害での環境利用にかかわる聞き取り調査と、4）それらの資料と個別の地域での既存の調査データをつきあわせる方法論の検討をおこなうために、災害やレジリエンス等の既存文献を環境利用という切り口で整理しデータベース化をおこなう。5）さらに文献の調査地の住民、研究者との情報交換をおこない環境情報ネットワークの構築をおこなう。6）研究成果をまとめた本を出版し刊行する。

４．研究成果

災害研究において挑戦的な研究を通して萌芽的な探索を行ってきた。それは既に研究と社会的に国内外分野を問わず一定程度の評価を得るに至った（出版物『霊性の震災学』『震災学入門』『悲愛』等）。一連の研究のなかで出てきた開拓すべき課題は、生と死 の“あわい”から考える社会構想であった。既存の社会学では地域コミュニティ、心理学的には心のケア、宗教学的には宗教組織や慰霊からのアプローチで対象を切り込むことができる。しかし、東日本大震災に代表されるように既存の方法論で切れるものの、それに収まりきらない問題群が、行方不明の存在であったり、幽霊の目撃談であったり、夢での邂逅であったりする。これらの問題を深く掘り下げることは、既存の学問で捉えきることができないものとして学問的なパラダイムを大きく革新させ、実践性と新たな理論的構

築を飛躍的に発展させる可能性を秘めていると言えよう。

東日本大震災から 5 年の研究成果として、次の 2 冊『呼び覚まされる霊性の震災学――3・11 生と死のはざまで』と『震災学入門―死生観からの社会構想』を上程出版することができた。

金菱清編『呼び覚まされる霊性の震災学』（新曜社）では、タクシードライバーの幽霊体験、その真相とは？ わが子は記憶のなかで生きていると慰霊碑を抱きしめる遺族、７００体もの遺体を土中から掘り起こして改葬した葬儀社、津波のデッドラインを走る消防団員、骨組みだけが残った防災庁舎を震災遺構として保存するかなど、被災地の生と死の現場に迫った。亡くなった肉親や津波犠牲者の存在をたしかに感じるという、目にみえない霊性の世界に迫ることで、生と死のはざまの意味の豊富化を提示することができた。

金菱清『震災学入門』（ちくま新書）では、「行政効率が悪く、経済的魅力にも乏しく、危険で不便な土地に住んでいる」というマイナスのカードを他者から次々に切り続けられている被災地の当事者たちであるが、異なるアプローチから震災をとらえてみるとそれとは全く違った被災地のあり方がみえてくる。被災地に覆っているまなざしは、いずれも「屈強で個人の意思がはっきりしていてものが言える」強さに由来する論理であるように思われる。そして、そのような正しさや強さに由来する論理では、災害弱者である当事者を強く頷かせるような納得させる理屈はでてこないと言えるだろう。本研究の成果は、上から冷たくまなざされる強さではなく、被災者が直面している徹底した「弱さの論理」からの思考方法を鍛え上げた。

また震災から 6 年の研究成果として、『悲愛―あの日のあなたへ手紙を書く』（新曜社）を上程出版することができた。

本書は、「亡き人への手紙プロジェクト」との一環で、実践的課題から震災の問いを作り出す画期的な試みである。2012 年に送り出した編著書「3.11 慟哭の記録－71 人が体感した大地震・巨大津波・原発事故」（新曜社）が、5W1H という行動記録をとることの記録への挑戦、そして死者との随伴行為の発見であった。それに対して、この手紙プロジェクトは、亡き人（大切なモノ、失われた故郷）への直接的な 挽歌の宛先のある想いがどのように綴られるかを通して、必ずしも調査者と被調査者との聞き取り行為で追えないようなより深い死者との相互行為の実態とその効果として災害のトラウマ研究 における金字塔を精神分野の領域から逸脱しながらも打ち立てることにあった。

50 人規模の対象者 （行方不明を含めた亡き人）へ依頼し、死者との具体的な向き合い方を手紙という形で直接綴っていただき、それを元に深い聞き取りを行い、私的なものに沈潜している生者と死者のあわいで生み出される意識と社会的意味を問うた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計１５件）

・金菱清、人々の目線から考える震災復興のあり方－震災をとらえる新しいアプローチ「震災学」とは何か」、『第三文明』、査読無、2017 年 pp.30-2

・金菱清、「制度を飼い慣らす居住の潜在力―時計のいらないまちを求めて」、『すまいろん』第 100 号、査読無、2017 年、pp.26-9

・金菱清、「 ＜助力－感謝／負い目－償い＞論－被災地の幽霊現象が切り拓く宗教的古層」（継続特集 3.11 後を拓く）、国際宗教研究所、『現代宗教 2017』、査読有、2017 年、pp.199-219

・金菱清、「言葉の回復（響く言葉、届かないことば②）」、『考える人』、季刊誌 2017 年冬号、査読無、2016 年、pp.36-7

・金菱清、「呼び覚まされる霊性―幽霊に導かれた人たち」、オリエンス宗教研究書、『福音宣教』、査読無、2016 年、pp.15-21

・金菱清、「死に支えられた幸福の国と「曖昧な死」への意味付け―ブータンから東日本大震災への応答」、『新社会学研究』、新曜社第１号、査読有、2016 年、pp.61-73

・KANEBISHI Kiyoshi、‘ The Inner Shock Doctrine: Life Strategies for Resisting the Second Tsunami', Institute on Social Theory and Dynamics, "Social Theory and Dynamics" vol.1、査読有、2016、pp.24-41

・金菱清、「日常と非日常を両立させる町へ」、『自然保護』、3-4 月号、査読無、2016 年、pp.8-9

・金菱清、「漁業の復旧・復興―漁業における内なるショック・ドクトリン」、ひょうご震災記念 21 世紀研究機構「国難」となる巨大災害に備える編集会議編、『災害対策全書別冊「国難」となる巨大災害に備える』4、査読無、2015 年、pp.26-427

・金菱清、「巨大地震で落ちなかった受験の神様と「担がれない」お神輿」－石巻市北上町十三浜追波地区」、高倉浩樹・滝澤克彦編、『無形民俗文化財が被災するということ』，新泉社、査読無、2014 年、pp.52-59

・金菱清、「災害リスクの“包括的制御 ”―災害パターナリズムに抗するために（特集　東日本大震災・福島第一原発事故を読み解く－3 年目のフィールドから）」植田今日子との共著、日本社会学会編、『社会学評論』、64 巻 3 号、査読有、2014 年、pp.386-400

・金菱清、「震災メメントモリ―「痛み温存」としての記録筆記法と死者をむすぶ回路」、『震災学』、荒蝦夷、3 号、査読無、2013 年、pp.176-189

・金菱清、「内なるショック・ドクトリン―第二の津波に抗する生活戦略」、『学術の動向』、査読無、2013 年

・金菱清、「内なるショック・ドクトリン―第二の津波に抗する生活戦略」、社会理論・

動態研究所編、『理論と動態』、6 号、査読有、2013 年、pp.20-36
・金菱清、「災害死を再定位するコミュニティの過剰な意義―if の未死と彷徨える魂の行方をめぐって―」、『フォーラム現代社会学』、12 号特集、「3.11 以前の社会学－阪神淡路大震災から東日本大震災へ」、査読有、2013 年、pp.104-113

〔学会発表〕（計８件）
・金菱清、「震災と霊性―亡き人の声を感じ、生きるという力」、シンポジウム『復活と創造　東北の地域力⑨』、2017 年 2 月 5 日、東北学院大学ホーイ記念館ホール
・金菱清、「見えないものを見る力を涵養する― なぜ専門家は幽霊を捉えることができなかったのか？」、『松山大学大学院講演会』、2016 年 12 月 10 日、松山大学
・金菱清、「被災地の幽霊は社会学のテーマとなりうるのか―霊性と「シェア」をめぐる死者との対話」、災害（１）災害と記憶部会、『日本社会学会』、第８９回、2016 年 10 月 8 日、九州大学伊都ｷｬﾝﾊﾟｽ 2207 教室
・金菱清、「痛みを温存する〈記録筆記法〉の実践」、東北学院大学地域共生推進機構・東北大学日本思想史研究室共催、『科学技術時代における新たな死生観・倫理的実践主体の創出をめぐる世代間対話』、2016 年 9 月 17 日、東北学院大学
・金菱清、「被災地の時空間を侵犯する死者の意味―タクシードライバーの幽霊現象を事例に」、シンポジウム社会情報学からみた場所と移動、『社会情報学会大会』、2016 年 9 月 10 日、札幌学院大学
・KANEBISHI Kiyoshi、〝Sharing grief with the dead after a devastating Tsunami: Healing from spiritual phenomena experienced by taxi drivers” Australian Grief and Bereavement Conference 2016, 12.4.2016 Australian Centre for Grief and Bereavement、メルボルン（オーストラリア）
・金菱清、「震災メメントモリ―不可視な隣人である“生ける死者”と回路を紡ぐために」、第 39 回地域社会学会招待講演、、2014 年 5 月 20 日、早稲田大学
・金菱清、「ふたつの“防潮堤” ―未曾有の災害に人びとはどのように向き合ってきたのか」、2014 年 1 月、土木学会講堂、第 38 回土木学会トークサロン

〔図書〕（計６件）
金菱清編、新曜社、悲愛―あの日のあなたへ手紙をつづる、2017、222
金菱清、ちくま新書、震災学入門―死生観からの社会構想、2016、204
金菱清編、新曜社、呼び覚まされる霊性の震災学―3.11 生と死のはざまで、2016、180
金菱清共著他、ちくま新書、反福祉論―新時代のセーフィティーネットを求めて、2014、216
金菱清、新曜社、震災メメントモリ―第二の津波に抗して、2014、240
金菱清、新曜社、新体感する社会学―Oh!my Sociology、2014、226

６．研究組織
(1)研究代表者
金菱　清（KANEBISHI　Kiyoshi）
東北学院大学・教養学部・教授
研究者番号：90405895